日豪交流４０周年記念事業

「支え合う会みのり」は食に関わる活動団体の連絡会組織の一般社団法人「全国食支援活動協力会（前・全国老人給食協力会）」の会員になっており、毎年夏に開催される「食でつながるフェスタ」に参加しています。全国食支援活動協力会は、オーストラリアのﾐｰﾙｽﾞ・ｵﾝ・ﾎｲｰﾙｽﾞ南ｵｰｽﾄﾗﾘｱ協会（以下 MoWSA）との交流が 40 年続いており、今年はこれを記念して「日豪交流 40 周年記念シンポジウム」が 9 月 26 日、キューピー株式会社のホールで開催されました。

MoWSA のボランティアが世田谷の「ふきのとう」の会食会を見学したことがきっかけで交流が始まりました。その後、MoWSA の理事を招いて日豪シンポジウムを 2 回開催し、次いで日本側が MoWSA の拠点のオーストラリアのアデレードに視察研修に行きました。それ以降、全豪の MoWSA の大会ごとに参加した時期もありました。

私は 4 回訪豪しましたが、第 1 回目の 1997 年が一番印象に残っています。朝早くからボランティアが調理し、高齢者に昼食を届ける支部を見学しました。自分達が建てた拠点の広いキッチンに高齢ボランティアに考慮した設備があること、ボランティアが誇りを持って活動していること、社会がその価値を認めていることに感動し、稲城の配食サービスが目指すのは「これだ！」と思いました。ホテルに帰り、初代代表の故・平野眞佐子さんと自前の拠点整備をいかにするかを話し合ったことを思い出しています。

現在の MoWSA は、高齢者対象の昼の配食サービス以外に業務用キッチンでチルド食品を作り、キッチンがなかったり辺鄙な支部へ配送して、そこのボランティアが食品を温め近隣の方に届けているそうです。さらに繋がり重視の世代間プログラム、料理教室が始まっています。以前は、会食会や居場所作りは自分達の活動範疇には無いとずっと発言していたのですが…

今回の討議内容は、「コミュニティ・非営利セクターが担う食支援活動の価値と期待」というテーマで、食の持つ力、ボランティアが食支援活動に関わる意義、コミュニティ形成、孤立孤食と食品ロス、活動を持続可能にするには、等が討議されました。

今回注目するべきところは、パネルディスカッションで食支援活動の基盤に関わる省庁、財団の方々（厚生労働省、内閣府、農林水産省、消費庁、全国社会福祉協議会、日本民間公益活動連絡機関、キューピーみらいたまご財団）が一堂に会して討議されたことにあると思います。

全国食支援活動協力会代表理事・石田 惇子